

# 梅雨明け

大和川義之

ドンと乱暴に熱々の番茶を入れた湯呑茶碗が、年中備え付けたままのホームコタツの上に置かれた。

長年の習慣とは恐れ入ったもので、番茶は一滴も毀れてはいなかった。

三月先の誕生日で古稀を迎える謙吉は、二歳下の節子の顔を、老眼鏡から上目使いで眺め、お礼のつもりか「うむ」と息を吐き一口含んだ。

向いに腰を据えている節子は、自分の湯呑茶碗を両掌で抱き、番茶の温かみを確かめ、茶の渋みを一口味わった後、手の届く位置にある簡易の化粧棚から、隣家の安塚氏より頂いた化粧箱入りの蕎麦饅頭を二つ取り出し、謙吉の手がざりざりに届く範囲に置いた。

十数年も仲良く糖尿病と付き合っている謙吉は、酒も好物だが甘いものも大好きな両刀遣いで、この蕎麦饅頭なら平気で十個はいけるが、節子の監視下では一日一個である。

謙吉の病気を慈しむような眼を向けた節子に「何だ」と眼差しで問えば「何でもない」と無言で首を振り、半分に割った蕎麦饅頭を口へ投げ入れた。

ニュースで知った梅雨入りは、空の神様が氣象庁との約束を律儀に守り、絹糸のように細かく冷たい雨糸を静かに落とし、薄日を浴びた紫陽花の葉から滴が零れるのがサッシ戸から見えていた。

医師の指導通りに、投薬療法を確実に守り、雨が降らない限りウォーキングを欠かさない謙吉だが、悪天候だと一日中テレビを点け、嵩高い図形で寝転がったり、足をコタツの上に投げ出したり、節子に、茶を入れる、コーヒーを入れる、新聞を持って来いだの、老眼鏡を綺麗にしるなどと注文を出し、家事に忙しい節子にとっては迷惑の上も無いのだ。

先ほどから謙吉が、もの珍しそうにサッシ戸食い入るように眺めていた。

大きな硝子の上を、何処で行き先を見失ったのか、カタツムリがぬるっとした足跡を残しながら、ゆったりと歩を進めていた。

謙吉は四十歳のころ、勤めていた鉄工所を退職し独立をした。仕事も順調に捗り、いまの家屋も手に入れ、色々好き勝手なことをしてきたが、五年ほど前に押し寄せた不況の波に乗り切れず会社を整理し、かろうじてこの家屋だけが残せた。

先ほど観たカタツムリも、大事な我が家の同居人だと、番茶を飲み、再び眼をサッシ戸に戻すと、足跡を残したまま、謙吉に何の挨拶も無く姿を消していた。謙吉は冷たい奴だと鼻で笑い、蕎麦饅頭の残りを口に入れ一気に噛み砕いた。

この住まいで二人の子を育てた。子供たちはそれぞれ独立し、所帯を構えていた。住まいは南北に離れているが、互いに車で三十分ほどの距離に暮している。ところがいくらか近いといっても、なかなか顔を見せてくれない。

長男は月に一度、それも給料日前の休日前夜に、孫を使い電話をしてくる。長男か嫁が教えたのであろう、あれこれと節子に夕食の注文を伝える。快諾した節子は、買い物運搬係である謙吉と一人で近くのスーパーへ買出しに行き、ついでに孫の好きな菓子と嫁の好物の高価なメロンを買って帰るのである。

嬉々として台所で奮闘し夕食が整ったところに、長男家族が訪れ、謙吉があきれるほど喰らい、褒美として節子は孫と入浴し、当然、長男夫婦にも湯を浴びてもらい「お義母さん美味しかった」と嫁から賞賛の言葉を頂き、冷蔵庫の中から食材を選び、米までつけて帰って頂くのである。

長女は十日に一度は顔を見せてくれる。亭主の愚痴を節子相手に長々と語り、その間、暴れん坊で悪ガキの孫相手に、謙吉が汗まみれになり、悲鳴を上げるまで付き合おうと、それを見た長女が孫に帰宅を告げ、冷蔵庫からめばしい食材やら、買い置きの調味料を手当たり次第に持って姿を消すのである。

物を与えて帰っていただく行為に、親が健康で五体満足であると存在を認め、まだまだ甘える余地を残し、元気で頼りがいが有る証拠だと期待されているのが幸せだと感じているのか、節子は子供や孫が訪れると二、三日は機嫌がよく、殺伐とした二人の生活の中に明るい空気を漂わせていた。

雨の所為もあつて子供たちの足が遠のき、そぼ降る絹雨に節子の眼が鈍った。そら始まつたと、謙吉は座る位置をずらした。

鬱々とした気配が、節子の心の中まで浸透し、老後の不安と寂しさに襲われ、助けを求めるように謙吉に意見を求めるのである。

日常生活の中でたびたび起こる物忘れから発生する認知症への不安である。二人のどちらかが認知症を患ったならば、本人の意思を無視して、強引に養護ホームへ入寮させ、強度の認知症患者の群れの中へ投げ込まれ、ヘルパーから幼児言葉で弄ばれ、用便の自由も取り上げられ、ごわごわの紙オムツを装着され、時間がくるまで交換されず、湿気とただれを我慢しなければならぬ。想像するだけでも悲惨な老後が待ち構えている。

それ以外に選択肢の無い未来には望みも湧かず、私が認知症を患った場合には、どうか謙吉の手で抹殺して欲しいと節子は訴えるのである。

「でもアンタは、私の意思は無視をして、さつさと施設へ送り込むのよね、きつと」

何度も聞かされている節子の愚痴に、いつも謙吉はきっぱりと否定してやる。「いいか節子、たとえお前が認知症を患ったとしても、一生この家で面倒見てやるよ、好き同士で一緒になり、良い子供や孫にも恵まれた仲だ、俺は喜んで下の世話もするし、決つて離すものか」

節子は眼を潤ませ頷くと、

「アンタ、死ぬ時は一緒に死のうね」と決め台詞で答える。

「当然だ、二人で楽に死ぬるような計画も練つてある。だが俺が先に認知症を患つたなら、さつさと施設へ送ればいい、俺のことは放つておいて、この家で子供に面倒を診てもらい、孫に囲まれて、この先を楽しめばいい」

節子は嫌だと首を振り、決して施設へ入れないからと断言をし、チラツと掛け時計に眼を移すと、コタツに両掌をつき、丸く太った身体を起こし、

「アンタ、お腹が空いたでしょう」

と台所に向うのが雨降りの夕暮れ時で、節子を納得させた謙吉は、無精鬚が生えた顎を節くれだった掌で一撫するのである。

鯖缶を使い、玉葱と馬鈴薯を煮る節子の得意料理の甘辛い香りが鼻に届いた。

「アンタ、今の内に湯を使いな」

謙吉は節子を真似て、両掌をコタツに当て立ち上がり、風呂場に向って歩むが、一足進むごとに部屋着が脱ぎ捨てられ、脱衣場に着くと、すでに丸裸であった。

節子はコタツの上に、夕飯の食材を並べ終わり、テレビを点けて長風呂の謙吉を待つのだが、今日はいつもとより時間が掛かりすぎるのが気に障った。

節子は掛け時計を眺め、もしや浴槽で何かあったのかと不安になったとき、風呂場の方から荒々しい足音が響いた。

「おいっ、素晴らしい計画が浮かんだっ」

全身から湯気を立て、水滴を振り撒き、一糸も纏わぬ謙吉が節子の前で胡坐をかいた。

「アンタ、何という格好よ、せめて下着だけでも着けなさいよっ」

興奮していた謙吉は、我が身体を見てペロツと舌を出すと、急いで風呂場で部屋着を身につけ、火照った赤い顔でコタツの前に座った。

すかさず節子が発泡酒を出すと、コップに移しグビツと喉に流した。

「おいっ二人して旅に出よう、少々の長旅だ」

「何よ急に長旅だなんて」

眼を輝かせ独り領き、いま一度発泡酒を流し込んで構え直した。

「俺が子供のころに、無くなった親父が良く聞かせてくれた話なんだが、名も知れない山里に黄金の番いの鳩つがが棲むそうな、夫婦揃ってこの鳩に願い事をすれば極楽往生が授かると伝えられ、親父も母親と捜し求めたかったのだが、お前も知つての通り、俺の母親は早く亡くなり、親父は望みを果たせなかったのだが、これを機に、お前と二人で探しに行こうかと思ひ立った」

「だから」節子は無関心そうに小さな声で言った。

「だから、二人で黄金の鳩を見つけて、幸せになろうと思う」

「行っちゃって気楽に言うけれど、そんな費用おかねが何処に有るって言うの、二人の収入たつて年金だけなのよ、旅行に当てる費用なんて、逆さに振ったって出やしないわよ」

「詳しいことも聞かないで、はなから邪険なもの言い方をするな、お前のように夢を持たない女なんて、ろくな死に方もできないぞバカッ」

癪に障ったのか節子は謙吉を睨み付けると、注いである発泡酒を一気に飲み

干した。

「おいつ、もっと大切に飲んだらどうだ」

謙吉は空になったコップを奪い取り、新たに注いだ。

「ふん、どうせ夢の無い女ですよっ」

節子がコップに手を伸ばした。謙吉は素早くコップを奪い口に持っていった。

「その黄金の鳩って、何処の国に棲んでいるか見当は付いているの？」

謙吉は首を左右に振った。

「東北の山郷か、木曾山中か、但馬の山奥か、はたまた阿蘇高原か、四国山脈か、洞窟の中か、人骨が散乱する廃墟に棲むのか、皆目見当も付かない、だが二人が共に助け合いながらの旅を重ねれば、きっと黄金の鳩も二人の誠意に答え姿を見せてくれるのだ」

「馬鹿なことを言って、生存<sup>いる</sup>って保証も無い黄金の鳩を捜し求める旅なんて行きたくも無いわ、どのみちどこか山の中で野たれ死ぬのがオチよ、ひよつとしてアンタが前々から言っていた、二人揃って同時に死ぬ計画って、まさかこの話じゃないでしょうね」

「違うよ節子よく聞くんだ、黄金の鳩を捜し求め、徒歩で全国を巡礼することに意義があるのだ、夫婦が助け合い巡礼の長旅をするのだ、苦しいことが多いと思うが、楽しいことや見知らぬ人との交流もある」

「ふんっ馬鹿げている、冗談じゃないわ、アンタの旅の計画はいつもそうじゃない、何年前かに、二人が極楽往生出来るからといって、満願を目指し四国八十八ヶ所巡礼の旅に強引に連れて行き、先ずは発心の道場から始めるといって、はや三番札所の金泉寺で歩き疲れ雨が降ってきたのを理由に、これは水入りだと止めて、次に西国三十三ヶ所を目指すといつて、俺は豊臣秀吉に良く似た生き方をしてきたのだから、秀吉が花見を催した醍醐寺から始めると大口を叩いて、京都の地下鉄東西線の醍醐駅から巡礼姿で勢い込んで歩いていったわね、それがどう、急な山道に足を挫いたと途中で断念し、もう二度と巡礼は止めたと三日も寝込んだのを忘れたの、そのたびに私に私に迷惑を掛けて、行くんだっからアンタ独りで行けば」

「俺独り？ 馬鹿を言うなよ、夫婦揃って行くからご利益<sup>りやく</sup>があるんだ」

「いいから、奇想天外な馬鹿な考えは止して、さっさと夕飯を済ましなよ」

「どうして邪険な物言いばかりをするんだ」

「アンタ独りで探し出し、わけの判らない黄金の鳩の綿毛でも持って帰れば、私も信じてアンタと一緒に極楽に付き合うわよ」

節子はテレビのボリュウムを高くし、箸を取り上げ紀の川漬けを、小気味良い音を立てて噛み砕いた。

謙吉は節子を睨みつけていたが、鯖缶を利用した煮付けを口にすると、視線を宙に浮かし、なにやら物思いに没頭しだした。

翌朝も気象庁の予報通りに実行する空から、前日より超えた雨粒が地を叩いた。

「でかける」

謙吉がコタツの前で陣取る節子に声をかけた。チラツと節子が窺うと、小さく折りたたまれた紙切れを愛用のウエスト・ポーチに入れ、傘を差して出ていった。

昼を過ぎても戻る気配がなく、少し不安になった節子は謙吉の部屋に入って、貴重品を保管してある書類ケースを探った。

節子が危惧した通り、謙吉の貯金通帳が持ち出されていた。時たま無鉄砲な行動を起こす夫の性格に、いよいよ不安が増し苛々しながらも、帰宅を待ちわびた。

玄関のドアが開く音がしたのは、夕方五時近くであった。連絡もなしに、何処をほつき歩いていたらと、思い切り怒鳴りつけてやろうと玄関に足を運ぶと、憔悴しきった謙吉が、視線を廊下に落とし、節子の傍を擦り抜け自室に入り、部屋着に着替えコタツの定位置に座り込んだ。

夕刊を手に取り、パラツと捲り眼を通さず畳むと、大きな溜息をついた。

節子が入浴を進めても、首を振って断り、夕食も食欲が無いと半分も食べなかった。

極度に元気を無くしている謙吉に、元氣付ける意味を含め黄金の鳩探しの旅に同行すると応えてやろうかと、節子は夕飯の片付けをしながら考えた。

もう寝るといつて謙吉が自室に消えると、発泡酒の空缶が横に倒れていた。

前夜はあまりにも早く寝たので、謙吉は節子より早く起きてきて、コタツの間のカーテンを広げ、サッシ戸を開け放つと両足を抱え込み、呆然とした眼で

そぼ降る雨を眺めた。

小さな庭には、節子が手植えをした花壇の草花が可憐な花を咲かせ、謙吉が夜店で買って植えた紫陽花が蕾を膨らませ、長男の孫が種を蒔いた朝顔の蔓が垣根に絡み、色付いた蕾が雨露のエキスを吸い取り、陽射しを待っていた。

謙吉の視界に、青と緑が入り混じったカラフルな蜥蜴が、器用に雨を避け、雑草の中へ走りこんだ。謙吉の眼に蜥蜴の素早い行動が映り、憔悴し計画を挫折しようとする惨めな自身に気付いたのか、頬に赤味を生えさせた。

旅の荷運びにリヤカーを買い求めに行ったが、売っている店が判らず、やっと思付ければ、予算を遥かにオーバーし、黄金の鳩を探す旅も計画倒れとなつたと落胆したが、小さな蜥蜴が必死に生きる姿に胸を打たれ、旅を断念してはなるものかと勇気が湧いた。

謙吉の白髪が交わる長い睫毛が上下をした。ポンと掌に拳を打ち据えた。

顔を洗おうと立ち上がり節子が部屋から出てきたのと、危うく衝突しそうになった。

「こんなに朝早く、どうしたの」

「早く飯をつくれ、喰ったら出かける」

外出着に身をやつした謙吉は、朝食を胃にかき込むと、唇の端に飯粒を一つ共にして出て行った。

あれほど憔悴していた謙吉が、意気揚々と外出した姿に、いつもの謙吉に戻ってくれたことでホッと一息つく節子であった。

雨続きで溜まってあった洗濯物を、部屋中に干していた節子が、玄関の開く音を耳にし、掛け時計に眼をやると、二時を超えていた。

お昼も摂らずに、何処をうろついていたのかと氣を揉みつつ、玄関へ行って驚いた。

「どうしたの、それっ」

大型ホームセンターに備えてある大型カートの荷台一杯に、ベニヤ板、角材、水道管のビニールパイプを積み、持って出た傘は荷台の傘差しに差し込み、謙吉の白髪頭から水滴がぼたぼたと三和土に落ち、着ている物からも滴り落ち、節子のサンダルを濡らした。

謙吉が、大きな嘔くさめをした。

謙吉の頭に、節子が乾いたタオルを投げた。

上がり框で下着姿になった謙吉は、乾布摩擦をしながら、また嚏をした。

「お湯が入ったから、浸かりな」

節子の声で下着を框で脱ぎ、両腕で身体を擦り浴室へ急いだ。

「クアツ熱い、気持ちいい」

浴室から喚き声を聞きながら、謙吉が脱ぎ捨てた衣類を集めた節子は、投げ捨てられているウエスト・ポーチのチャックを開き、中に有る数枚の札と小銭に眉を顰め、預金通帳を抜きだし開いた。

謙吉がこつこつと貯めてあった十五万円ほどの中から、五万円が引き出されてあった。

黄金の鳩を探し求める旅が実行される謙吉の強い意思が、節子にひしひしと伝わった。

節子は、湿り気の残るウエスト・ポーチの中身をコタツの上に広げ、謙吉が風邪を引かぬように気を遣い、卵とじうどんを作った。

少しでもいいから、感謝の言葉を発したらと、顔を紅潮させうどんを啜る謙吉を睨みつけた。節子の眼を意識することなく、だしを一滴も残さず食べ終えた謙吉は、道具箱を保管してある押入れから、電動サンダーを手に玄関へと向った。

スイッチを入れると、近隣に響きわたる音を立て始動するサンダーで、カートの側面の太さ3ミリほどの格子を切り離し始めた。

大きな音も迷惑なのに、カートを切断する謙吉に、慌てふためき、眼を丸くして叫んだ。

「アンタ、何をするの、そのカートはお店のでしょう」

「煩い、これは貰ったのだ」

「嘘つかないで、カートをくれる店なんて聴いたことが無いわ、人の物を盗んでまで鳩を探しに行きたいの」

謙吉は節子を見無視し、元鉄工所の技を生かして、見る間に格子を切り離した。

荷台の底と車輪の空間部分に、ベニヤ板と角材を使い、物入れを拵えた。

その日の作業を終えた謙吉は独り悦になり、先ほど浸かった風呂に再び入り、長湯を楽しみ、節子から旅の質問が出ることを期待し、晩酌の発泡酒を味わっ



ていたが、節子は不機嫌なまま夕食を食べ終えた。

一メートルの高さ、横幅五十四センチ、狭まれた前幅三十八センチのスペースに、時代劇ドラマでよく見る駕籠を髣髴させるような骨組みがパイプで造られ、パイプに守られるように、安価の座椅子が備え付けられた。

取手部分の上部に、謙吉が直立しても二十センチほどの余裕がある高さのパイプで庇が作られ、切り離れた側面には、パイプでドアの骨組みを拵え、総ての骨組みには補強材が加えられ、眺める謙吉の満足げな表情が、節子にとっては降りかかった災難であった。

大きな声でコーヒーを節子に要求し、コタツの前の定位置に座り、コーヒーを旨そうに飲みながら、節子を追う眼は旅の同行を誘っていた。

明くる朝早く「よっ」と気軽にドアを開け、謙吉の幼馴染のテント屋が顔を見せた。

謙吉は顔をほころばせ、食べかけの朝食を放置し、玄関へ飛び出した。

二人はパイプとベニヤ板で作られた、小型戦車風に姿を変えたカートを取り囲み、なにやら意見交換し、仲良くしているのを盗み見していた節子は、テント屋の主人に茶の接待もせず、眉を顰めて二階へ駆け上がり、自分の携帯電話の短縮番号を押した。

相手が出たのか、助けを求め哀願する表情を浮かべた節子は、ベランダからテント屋の軽トラックを睨み付けながら、早口で喋りだした。

使い込まれた軽トラックは、睨み付け電話を掛ける節子を嘲笑するようなエンジン音を響かせ、排気ガスを謙吉に浴びせかけ走り去った。

住宅地の角を車が見えなくなると、まるで謙吉が節子を捨て去って行く光景と重なり、その幻想が節子の身体を覆い被さった。

これまで重ねた四十数年の結婚生活は何だったのかと、ベランダで蹲った節子は、先行きの不安と絶望感が、梅雨空の暗雲のように襲い掛かり、携帯電話を握り締め声を忍ばせ肩を震わせた。

入浴を済ませた謙吉がコタツ前の定位置に座ると、このところ夕食の惣菜の品数も減り、謙吉の好きな刺身も消えていたのに、節子の得意料理の肉じやが、八宝菜、中華サラダ、鶏の唐揚げ、海老フライが並べ立てられ、そのうえ刺身の盛り合わせと、テーブルの上に乗れ切れない豪華料理が並べ立てられ、台所

で丸い身体を忙しく動かす節子を窺いながら、冷蔵庫から発泡酒を取り出し、コップに注ぎ箸を手にしてハツとして眼を節子へ向けた。

どの料理も、子供や孫たちの好物である。嫌な予感が頭に浮かび、玄関においてあるカートに眼を投じた。

謙吉の予感は、まさに正確に的中した。

最初に現われたのは、悪がきの孫を連れした長女一家で、孫は謙吉の作品を興味深く睨んでいたが、パイプを掴み身体を宙に浮かせて、キャツキャツと騒ぎ始め、カートを壁に激突させたり、靴を穿いたままカートに乗り込み、パイプを蹴ったりするのを眺めた長女が口先だけで軽く叱責した。

壊されはしないかと窺っていた謙吉は、もう我慢ができぬと、立ち上ろうとした時、

「おっ、元気がいいな」

と、長男家族が訪れ、長男の孫も参加し、ジャングルジムでも楽しむように、パイプにぶら下り、小さな孫の体重が細いパイプを湾曲させたが、謙吉の工作物は悲鳴を上げながらも耐えていた。

子供たち夫婦は、歓声を上げ遊び道具と化している工作物がどうなるうと無関心な表情で、コタツの周りに集まった。

長女の子が脱兎のごとく走り寄り、鶏の唐揚げを口に入れ海老フライを手に掴むと、長男の子も口に唐揚げ、両手に海老フライを持ちカートの中へ飛び込んだ。

謙吉は発泡酒を口に含み、泥靴と手垢で汚れたカートは、明日にでも清掃すればいいのだと腹を決めた。節子が子供たちを招集したのは明白である。謙吉が言った黄金の鳩探しの旅を断念させるための集まりであるのは百も承知である。なら、より孫たちが騒ぎ続ければ、説論の箍たがも少しは緩むのにと、箸を取った。

謙吉の家庭では、長男が生まれて直ぐに『空腹時に叱れば、必ず必要以上の反感を覚える、腹に物を入れれば穏やかになり、聞く耳を持つ』と家訓にしてきたが、今まさに家訓通りに節子と子供たち夫婦は食事を取り、たまに鋭い視線を謙吉に向けてきた。

孫たちには、別のテーブルに食べ物を用意され、子供夫婦が食べ終わると、謙吉がまだ食べているのに食器が片付けられた。番茶が配られコタツの上には、

謙吉の箸と発泡酒だけとなった。

「お父さん、何を考えているの、いい歳して」長女の第一声である。ほら、きやがったと、憤った眼で長女を見た。

子供たち夫婦に節子を加え、謙吉を攻める論議はどれもが正論であることは承知をしている。だが謙吉は頑として、妥協はしない覚悟であった。

「お前たちの言い分は良く判る。常識人のお前たちの指針によって、俺と節子が老いさらばえるのは我慢が出来ない。行動力も奪われ、自主性の活動も取り上げられ痴呆の日々を送りたくない。俺は父親が求めたように黄金の鳩と巡り会い、母さんと二人の幸せを授かる旅を、俺の人生の締め括りとして燃焼したいのだ、だから許して欲しい」

「お母さんはどうするのよ」

「本当は一緒に行って欲しいのだが、節子には節子の生きる道がある。同行できないならそれも仕方ない」

「お金はどうするの、泊まる所は？」

「心配は掛けない、旅に出た日が俺の命日として、線香の一本でも供えてくれればいい」

頑なに主張する謙吉と、周りを取り囲む五人の大人たちの論争が続き、孫たちがコタツの間で熟睡するのを節子が気付き、その日は解散をすることにした。話し合いの続きは次の休日に長男のマンションに集合することにしたのである。

翌朝早く起床した謙吉は、カートを外へ出し、孫たちが破損した箇所と、汚した箇所を洗っていると、テント屋が訪れ、パイプの上に持ち込んだ製品を広げた。

白い糸が基盤の目に縫いこまれた透明のビニール生地がパイプに付けられ、ハンドル部分に謙吉が立つと見通しもよく、雨にも良く耐えられそうであった。休息していた雨がポツポツと落ちてきた。

「こりゃいい寛ちゃん、濡れないや」

「万全な設計だ謙ちゃん」

二人は満足そうに顔を観合せた。

雨は直ぐに止んだ。謙吉はテント屋の軽トラックに同乗すると、節子に断り

も無く出掛けて行った。

節子は仏壇の前に座り込み、義両親の遺影に手を合わせ、般若心経を繰り返して唱えた。

謙吉が帰宅した様子が伝わり、節子が玄関へ出ると、框に買ってきた品を置き、カートの一つ一つ買ってきた商品を確認しながら収納し、締めくくりに長年愛用してきた雨傘をパイプに差込み終わると、コタツの定位置に座り、じつとカレンダーを眺めた。

二日先の日付けに、丸く印が入り長男のマンションに集まる時刻が入っていた。

謙吉は多人数に囲まれ説得されるのが疎ましくなっていたが、それよりも、孫たちから回らない舌で説得されると、せっかく固めた決意がばらばらになる気がしていた。

節子は謙吉を窺いながら、絶対に謙吉の決意を変えねばと、番茶を口にした。

夕食の準備の気配を感じながら湯船に身体を沈めていた謙吉は、両掌で湯を掬い顔に浴びせると、湯の滴に混じって、ばたばたと黄金の鳩が飛び立つ気配を感じ、浴室の中を雄飛し、旅へ誘う風を感じた。

謙吉はより丹念に身体を洗い、伸びている無精髭も剃り、新品の下着を身に着けた。

夕食はいつもより質素であったが、節子が差し出した発泡酒を断り、節子の手料理を一口一口噛締め、味を丹念に確かめ食べた。節子を真似るように湯呑茶碗を両掌で包み、節子をいとおしむように飲んだ。

「先に寝る」無愛想に投げ捨てるような言葉で立ち上がった謙吉は、食べ終えた食器を台所へ運び寝室へ姿を消した。

咄然として謙吉の姿を眼で追った節子は、節子が病に倒れても食事の後片付けなどしたことがないのに、この数日の暴言、叱咤がさせたことなのか、いやと節子は首を振り、謙吉の残像を追いか求めた。

その夜、節子は重苦しい不安に悩まされ、謙吉の夕食時の行為が気になり、寢床に入ってもなかなか寝付けないままに夜が明けた。

地味なカーテンから、静寂を伴った淡い陽がコタツの間に入っていた。

音を立てないように二階の自室から、薄いジャンパーを羽織り綿のシャツに

ジーパンを穿いた謙吉が降りてきて、テーブルに自分の携帯電話を置き、一階で眠る節子の部屋の前に佇み、小さな声で「ありがとう」と呟いて頭を深く下げた。

玄関で馴染んだスニーカーを履き、そっとドアを開け、カーツを押し出した。

「ばっかっ」

謙吉は、驚く速さで振り返った。

薄暗い廊下で、赤いジャンパー姿の節子が立っていた。

「節子」

「バカッ、死ぬときは一緒と約束をしたでしょう」

謙吉は両眼を潤ませ、カーツの底から真新しいスニーカーを節子の足元へ差し出した。

「この前、買っておいた」

二人が揃って外に立ち、節子がすでに配られた朝刊を取ろうとしたが、謙吉は押し止め水仕事で荒れた節子の掌を固く握りしめ、駕籠に見立てたカーツに備えた座椅子に座らせ、朝靄に煙る住み慣れた地に別れを眼で告げ、一步踏み出した。

梅雨明けを宣言しても良い空模様が、夫婦の旅立ちを祝福していた。

紫陽花が見送る坂道を登り、辻を右に曲がり老いた夫婦が姿を消した。

ぐあっしやくんと、大きな破壊音がした。

周辺の住民が、地震でも起こったのかと、小窓が空けられ、カーテンが開かれた。

住民の視線が集中する中を、丸い尻を擦り、足を引き摺り、激怒に顔を歪めた節子が自宅に向かい、朝刊を引き抜き、強烈な勢いでドアを閉めた。

首を傾げ怪訝そうな顔付きをした謙吉は、カーツに節子の体重で破壊された荷台に、パイプや小物入れの残骸を積み、顔を合わす近隣の住民と朝の挨拶を交わしながら、自宅へ戻った。

朝靄が僅かに残る空に、旅立ちを見守っていた黄金に輝く鳩が、嘲笑するように東の空に飛び立ったのを、謙吉は気付く余裕も無かった。